

2019 年 5 月 30 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880097

氏名 若手研究者
(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 メルボルン (国名 オーストラリア)
2. 研究課題名 (和文) : ソーシャルメディアにおけるコミュニティごとで使われる語の新たな意味の獲得
3. 派遣期間： 2018年 6月 1日 ~ 2019年 5月 31日 (364日間)
4. 受入機関名・部局名： School of Computing and Information Systems, The University of Melbourne
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

ソーシャルメディアの文脈から、単語の新たな用法を検出するニューラルネットワークモデルを提案し、ベンチマークテストにおいて、提案手法は従来手法よりも高いF-1スコアを獲得した。その差は統計的に有意な差であった。また、本提案手法を応用することでソーシャルメディア上で新たな使われ方がされる単語の列挙が可能となった。

提案手法は、人工的に作成された疑似の負例データを生成し、これを用いてニューラルネットワークを学習することで、単語の新たな用法を検出するものである。提案手法の強みとしては、教師データを必要としないこと、言語非依存であることの2点である。

本研究は、本派遣プログラム終了後も継続して行う予定である。留学中に得られた成果を用いて、国際会議に論文を投稿する予定である。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

提案手法によって得られたベンチマークスコアは、従来手法と比較して高いスコアを達成しており、研究成果としての強みの一つとなる。提案手法を多言語へ適用した場合の評価実験を重ねた上で研究成果発表の準備を行う。

本研究は、本派遣プログラム終了後も継続して行う予定である。提案手法を応用することで、従来の知識自動獲得手法を拡張することを目標としている。また、本研究で得られた成果は申請者の博士論文の一部とする予定である。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

1. 共同研究力

申請者は、受け入れ研究室の教授だけではなく、他の研究機関の研究者とも合同で研究を行った。企業の研究者も交えて、全員が一つの目標に向かって研究を行うことができた。この経験は、今後、共同研究を行うときに役に立つため有意義である。

2. 英語を用いて研究の議論ができるようになったこと

プログラム採用前は、身振り手振りを用いてなんとか英語でのコミュニケーションができる程度だったが、本プログラム終了間際には、つまりきはするものの、英語での議論を滞りなく行うことができるようになった。